

日本におけるキリスト教伝道に関する一考察  
—清里の父ポール・ラッシュの伝道成果をヒントとして—<sup>1</sup>

Some thoughts on the Christian Evangelism in Japan  
— What does Paul Rusch, Father of Kiyosato, tell us about? —

加藤 知子  
Tomoko KATO

## Abstract

The person who laid foundation of modern Kiyosato (Yamanashi Prefecture, Japan) was Paul RUSCH, an American lay missionary of the Anglican Church. He introduced know-hows about the modern agriculture and tourism to Kiyosato after World War II. Kiyosato's post-war success is mainly due to Rusch's first-class effort, thanks to which the area continues attracting tourists from regions like Kanto and Chubu in Japan.

Being a Christian missionary full of passion, he built St. Andrew's Church in Kiyosato, hoping that one day Christianity would prevail in Kiyosato and Japan. How successful has this endeavor been? Why has the Christian population in Japan remained small despite the efforts by passionate missionaries like Rusch? Can we find any similarities among the Christian and Japanese cultural traditions? How will the religious landscape change once Christianity becomes a major religion in Japan?

With these research questions in mind, and taking Kiyosato St. Andrew's Church as a starting point, this paper will give some thoughts on Christian evangelism in Japan from an intercultural understating point of view.

キーワード：ポール・ラッシュ、清里、キリスト教伝道、日本、異文化理解

## I. はじめに

観光地として名高い山梨県北杜市にある清里の基礎を作った人物の一人は米国人のポール・ラッシュである。ラッシュは、神学を修めた聖職者ではないが、関東大震災直後訪日したのをきっかけに日本における聖公会伝道に深く関わり、BSA (Brotherhood of St. Andrew) 日本支部を再建した。このようにキリスト教伝道に深く関わった彼は、清里の父とも呼ばれているが、それは彼が清里に青年キリスト者のためのキャンプ施設清泉寮や清里聖アンデレ教会<sup>2</sup>を建設し、また、清里農村センター（現在の公益財団法人キープ (KEEP (Kiyosato Educational Experiment Project)) 協会、以下 KEEP) を通じて酪農業と観光業を清里の産業として牽引したという業績があるからである。

<sup>1</sup> 本論文は、2019 年度星城大学経営学部研究費を受けて執筆されている。

<sup>2</sup> 文献・インターネットサイトによっては、清里聖アンデレ教会、聖アンデレ教会、のように表記に揺れがある。文脈で判断できる時には、清里という字句を省略していると思われる。本論文では、統一して清里聖アンデレ教会と表記する。

ラッシュについては、伝記的視点から書かれたもの<sup>3</sup>、観光産業の視点からラッシュについて言及したもの<sup>4</sup>、そして、スポーツの文脈で書かれたもの<sup>5</sup>など、彼の多方面での活躍に合わせて文献もまた多様である。またそれらに加えて、立教学院展示館からラッシュ生誕 120 周年を記念して冊子が発行されている<sup>6</sup>。スポーツ関連の文献が出ているのは、ラッシュが日本にアメリカンフットボールを紹介した人物でもあるからであり、立教学院展示館からの冊子が発行されているのは、ラッシュが立教大学にて教鞭を取っていた経歴があるからである。その他、ラッシュとキリスト教（聖公会）との関わりについて、報告書（著者はラッシュ自身）という形での文献がある<sup>7</sup>。

ラッシュは 1941 年 12 月の日米開戦後母国アメリカに帰国したが、終戦後再度来日、清里に教会を建築した。清里聖アンデレ教会である。ラッシュが始めた清泉寮などを含めた KEEP の施設は現在、清里の重要な観光資源となっており、観光客でにぎわっている。観光カリスマでもある萌木の村株式会社代表取締役社長舩木上次<sup>8</sup>が示唆しているように、所謂バブル経済崩壊後、ラッシュを文化的核として、観光的落ち込みから清里を復興させる試みは成果を上げているようである。しかしながら、伝道者ラッシュが望んだ日本におけるキリスト教伝道は、どこまで成功しているのだろうか。この点に特に焦点を当ててラッシュの業績を論じたものはまだ見当たらないようである。本論文では、本論文筆者による清里訪問・見学、清里聖アンデレ教会司祭からのメール等情報提供、ポール・ラッシュに関して出版された文献や、インターネット上の情報を中心に、清里聖アンデレ教会に見られる日本的なものと、清里並びに日本におけるキリスト教伝道について異文化理解の視点から考察する。

## Ⅱ．日本聖公会清里聖アンデレ教会の概要

日本聖公会清里聖アンデレ教会は、JR 小海線清里駅から徒歩で 10 分ぐらいのところに位置している。ラッシュが創設した KEEP への道はポール・ラッシュ通りと命名されており、教会はその道から少し西側に入ったところに清里聖ヨハネ保育園を隣接する形で佇ん

---

<sup>3</sup> McDonald & McDonald: Paul Rusch in Postwar Japan: Evangelism, Rural Development, and the Battle Against Communism, The University Press of Kentucky, 2018、エリザベス・アン・ヘンフィル（松平 信久、北條 鎮雄訳）：キープへの道—昭和史を拓いたポール・ラッシュ。立教大学出版会、2018、山梨日日新聞社（編）：清里の父ポール・ラッシュ伝。山梨日日新聞社、2004、など。

<sup>4</sup> 舩木上次：清里百年計画で生まれ変わる。観光文化 Vol.154, 2002 など。

<sup>5</sup> 井尻俊之、白石孝次：1934 フットボール元年：父ポール・ラッシュの真実。ベースボール・マガジン社、1994 など。

<sup>6</sup> 立教学院展示館（編）：わが人生、日本の青年に捧ぐ：知られざるポール・ラッシュ物語：立教学院展示館第 3 回企画展：ポール・ラッシュ生誕 120 年企画。立教学院展示館、2017。

<sup>7</sup> ポール・ラッシュ（飯田徳昭訳；立教学院史資料センター監修・解説：日本聖公会：ポール・ラッシュ報告書。立教大学出版会（有斐閣（発売））、2008。

<sup>8</sup> 国土交通省観光庁（[https://www.mlit.go.jp/kankocho/shisaku/jinzai/charisma/mr\\_funaki.html](https://www.mlit.go.jp/kankocho/shisaku/jinzai/charisma/mr_funaki.html)）に、観光カリスマとしての舩木の記事がある（2019 年 11 月 13 日閲覧）。また、松下政経塾のサイトに兼頭一司（2006）「きみはスーパーオヤジを見たか？」と題して、舩木に関するレポートがある（<https://www.mskj.or.jp/report/2818.html>（2019 年 11 月 13 日閲覧））。

でいる。日本聖公会の教区の中では、横浜教区に属する教会である。

「日本聖公会横浜教区」サイト<sup>9</sup>によれば、清里聖アンデレ教会は 1948 年、聖堂として聖別されたという。信徒数は約 200 人、司祭はバルナバ大野清夫氏である（いずれも 2019 年 11 月 11 日現在）。教会建物内にある至聖所は石で組み上げられているが、その石は地元川俣溪谷から運び上げられたものである。会堂は木造であり、会衆席は畳敷、しかし教会の聖鐘は、アメリカ大陸横断鉄道の機関車の鐘が使われているとのことである。春から秋にかけては学校団体など多くの来教者があるという。同サイトでは、信徒数 200 人は規模としては大きいものではないと記されている。ただし、聖公会ではないプロテスタントの教会では、信徒数が 200 人に満たないところも少なくないので、200 人の信徒数では小さいというのも、日本聖公会の基準では小さい教会である、ということになるのであろう。



図 1 清里聖アンデレ教会への標識（左）とポール・ラッシュ通りの標識（右）<sup>10</sup>

「日本聖公会横浜教区」サイトには、清里聖アンデレ教会では、主日（日曜日）には、午前 6 時と午前 10 時 30 分から聖餐式、午後 6 時から夕の礼拝、教会歴による祝日には、午前 6 時から聖餐式、平日（月曜は休み）には、午前 6 時から朝の礼拝／聖餐式、午後 6 時から夕の礼拝が執り行われていると記されている。毎月第 3 木曜には午前 10 時 30 分から当月の逝去者記念聖餐式が行われている。

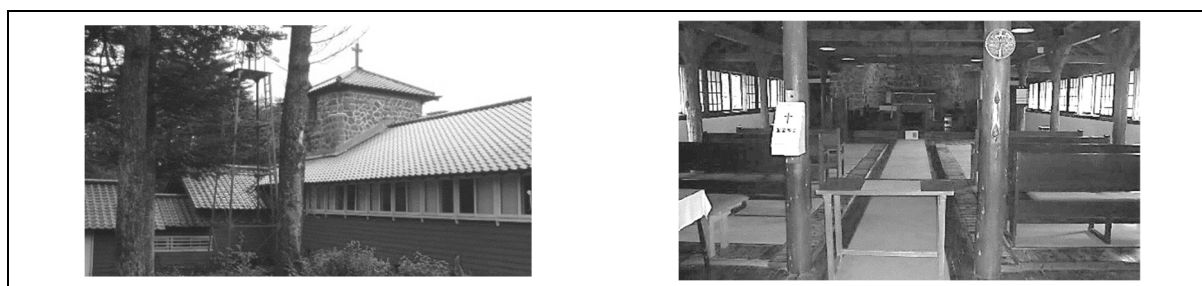


図 2 清里聖アンデレ教会の外観（左）と内部（右）

KEEP のサイト内に、清里聖アンデレ教会のウェブサイトがある<sup>11</sup>。同サイトによれば、

<sup>9</sup> 「日本聖公会横浜教区」 [https://anglican.yokohama/?page\\_id=290](https://anglican.yokohama/?page_id=290)（2019 年 11 月 10 日閲覧）。

<sup>10</sup> 本論文掲載の写真は全て筆者が清里で撮影したものである。

<sup>11</sup> 「聖アンデレ教会とは」 [http://www.keep.or.jp/place\\_event/andrew/](http://www.keep.or.jp/place_event/andrew/)（2019 年 11 月 10 日閲覧）。本論文の情報は全て閲覧時のものである。

清里聖アンデレ教会では毎月1回、日曜日の礼拝後に愛餐会（昼食会）ナルドの集い（婦人会）例会が、また、隔月1回、日曜日の礼拝後に愛餐会（昼食会）B S A：聖徒アンデレ同胞会・清里支部の例会が開かれるという。更に、毎月家庭集会があり、また、聖書リーディング（聖書を読んでみよう～の集まり）が毎月第1木曜日午前9時30分から教会の図書室で開催されている。結婚式や葬儀なども、清里聖アンデレ教会で行うことができ、日本聖公会の式文を用いて、司祭司式により執り行われるとのことである。

### Ⅲ．写真で見る清里聖アンデレ教会に見られる日本的なるもの

本章では、筆者撮影の写真を示しながら、清里聖アンデレ教会に見られる日本的なるものについてまとめる。

前章で指摘したとおり、清里聖アンデレ教会の至聖所の石は、地元川俣溪谷から運ばれたものである。また、会衆席には畳が敷かれている。脚注10の「聖アンデレ教会とは」によれば、これは、親しみ易さへの配慮であるという。2019年8月に、本論文筆者が見学した際には、畳の上に椅子も配置されていた。おそらく、高齢者には椅子掛けのほうが座りやすく、また、畳の上に座る習慣のない者が、外国からはもちろん、日本国内からの来教者の中にも少なくないことに鑑みてのことであろう。

玄関を入ると下駄箱があり、会堂に入る前のところに、各種案内書や献金のコーナーがあった。献金は、手作り品の代価を支払う方式も取られていた。手作り品は教会の写真のポストカードや、お守りである。お守りは、小さなレースの袋の中に小型のマリア像を入れてあり、教会の婦人会メンバーによる手作りであるという。

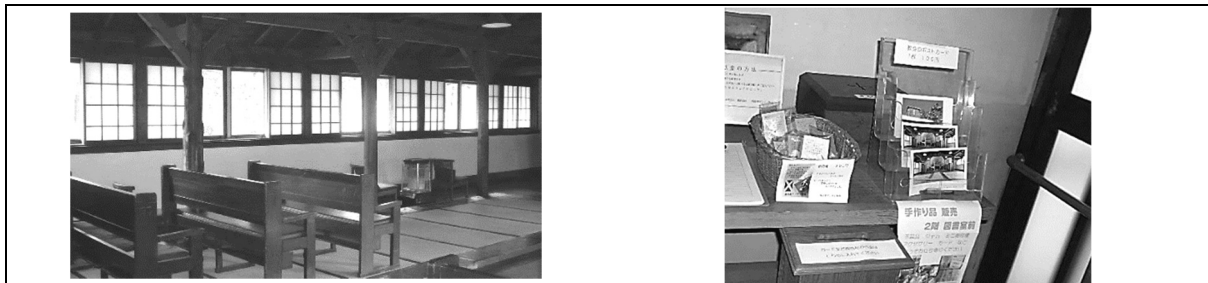


図3 畳上の椅子（左）と手作り品が置いてあるコーナー（右）

玄関天井からの電灯や、建物付近の草地の高原らしい美しさなどから、献堂当時の面影が偲ばれ、また、清里に馴染むように配慮して建物が建てられたことが想像できる。



図4 玄関天井からの電灯（左）と玄関入り口反対側の草地の様子（右）

教会を出て清泉寮に向かってポール・ラッシュ通りを登っていくと、途中には牧草地が広がっている。本論文筆者が清里を訪れた時は深い霧が立ち込めており、牛の群れが牧草地にいるのかと思ったところ、それは巨大な石群であった。山梨日日新聞社（編）（2004）によれば、第二次世界大戦後、ラッシュの尽力により米国からトラクターが輸入されたという（pp.398 - 402）<sup>1)</sup>。それ以前の清里開拓民は、このような石に悩まされたことであろう。トラクターは現在、清泉寮近くのポール・ラッシュ記念館と、前述の船木上次が社長を務める萌木の村に展示されている。北杜市高根町（編）（2008）によれば、船木社長の父親が KEEP で働いていたことがあり、船木社長自身も幼少の頃、ラッシュとの交流があったという（p.31）<sup>2)</sup>。船木上次については、ROCK KIYOSATO MOEGINOMURA サイトの「ROCK HISTORY」にも詳細が記されている<sup>12)</sup>。

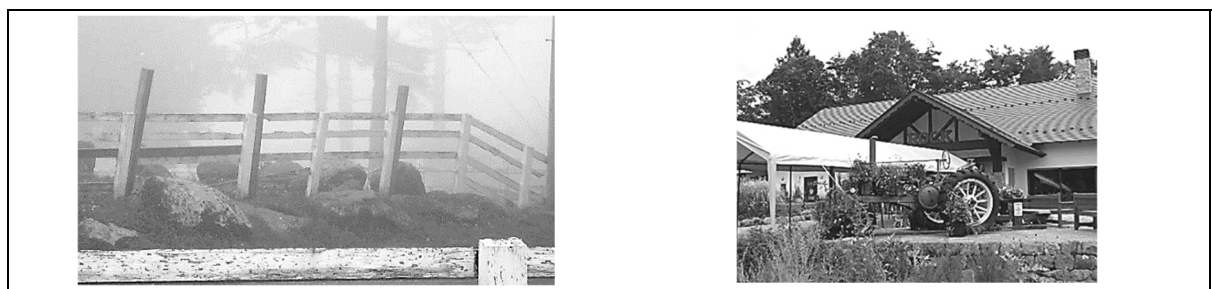


図5 霧の中に見える石群（左）と萌木の村に展示されているトラクター（右）

ポール・ラッシュ記念館横にはラッシュが暮らした家が残されている。ラッシュが写っている写真や彼が受け取った数々の賞状などが掲げられ、展示室の様相を呈しているが、ラッシュが生活していた当時の様子がよくわかる。この家は特段日本的というよりは、米国人ラッシュが生活しやすいように作られている印象を受ける。記念館にはアメリカンフットボールの殿堂も併設されている。

#### IV. 見えない次元での日本的なるものと清里聖アンデレ教会

小説家の三島由紀夫は、1968年11月16日に茨木大学講堂で行われた学生とのティーチンの中で、「正倉院にもし火事が起れば焼けちまって永久に返ってこない。文化というものはもちろん形として残るものでもあります、それが同時に我々の心の中に我々の護るべき一つの行動様式、日本人としての一つの生活のつくり方、あるいは生き方、その何々仕方、その仕方というもので護らなければ絶対護れないものである」と述べている（三島2006、pp.312 - 313）<sup>3)</sup>。この考え方は異文化コミュニケーションの分野でも通用するものである。八代ら（2009）では、文化には見える部分と言えない部分があり、見える部分の文化には、建築・衣服・食べ物など、見えない部分の文化には、ものの見方、考え方、価値観、行動規範などが含まれるという（pp. 18 - 20）<sup>4)</sup>。三島が形として残るものと称したものは目に見える部分の文化、我々の護るべき一つの行動様式などについて言及したものは目に見えない部分の文化、として分類することができる。本論文でこれまで用いてき

<sup>12)</sup> 「ROCK HISTORY」 <https://rock1971.jp/history/>（2019年11月15日閲覧）

た、日本的なるもの、という言葉は、見える次元・見えない次元両方の日本文化を指し、日本文化と日本的なるものとは、本論文では同義として扱う。

清里聖アンデレ教会の会衆席は畳敷きでスタートした。確かに畳は日本的なるものであり、地元清里の当時の日本人に親しみやすいようにというラッシュの配慮である。しかしながら令和の現在は、日本にありながらも自宅に畳敷きの部屋がない家が珍しくなってきた。床の間なども今では家の中というよりは博物館や資料館でお目にかかる類のものとなりつつある。従って、もし今、日本人にとって垣根の低い会堂作りを目指そうと思って会衆席を畳敷きにしても、効果はあまり望めそうにもないだろう。

しかしながら、ここで注目すべきなのは、畳という物体ではなく、むしろ、畳敷きにしようと考えたラッシュの思いなのである。すなわち、彼自身にとっては米国流の会衆席が良かったのかもしれないが、そこで一步譲って、日本人にとって居心地がいい会衆席とは何かと考えた、その考え方に着目すべきだというのである。そして実際、清里聖アンデレ教会ではその考え方が受け継がれているようなのである。畳にこだわれば日本に配慮していることになるのだ、と結論づけてしまうのではなく、その方が、利用者が居心地よく感じるだろうと思えば、必要に応じて畳の上に椅子を置いてしまう。畳敷きにすれば日本らしさが出せるが、一步譲って会衆の居心地良さを優先し、椅子も設置しようとする。この方がラッシュの望んだ心意気に近いものであろう。そして相手を慮って譲り合う、この心意気は、目に見えない次元での日本的なるものそのものでもある。

もう一つ注目すべき点は、ある特定の文化的要素が他の文化的要素を排除せず、ハイブリッド的にバランスを取っているという事実である。清里聖アンデレ教会では、建物全体の雰囲気はあくまでも教会であり、仏教寺院や神道の社と比較すれば異なっている。しかしながら、至聖所には地元川俣溪谷からの石を用いるなど、教会建築だからといって、日本の地元の色合いを消すことはしない。一方、建材を全て地元のものにすることもなく、第Ⅱ章でも言及したように、アメリカ大陸横断鉄道の機関車の鐘も使われている。会衆席についても、椅子導入の際に畳を全て板張りにすることはなく、畳はそのままにして、その上に椅子が置かれている。

また、現在の清里聖アンデレ教会の会堂入り口前で販売されている、手作りのお守りも、中身はマリア像なのだが、マリア像そのままを販売するというよりは、小さな袋に入れて日本人が馴染んでいるお守り風に仕立てられている。これは、訪れる日本人が手に取りやすいように配慮しているのであろうか。いずれにせよ、異国風のマリア像と日本風のお守り袋がハイブリッド的に融合することとなっているのである。

このようなハイブリッド的な取り計らいは、日本の生活のあらゆる場面で見られるものである。新しいものが生活に入ってきて、それだけが日常を占めてしまうのを見ていたのではなく、日本人は、これまで馴染んできたものと何とか共存させようとする。これも、見えない次元での日本的なる文化の典型的ありようである。ラッシュが、そして、その後の清里聖アンデレ教会が、教会について取ってきた判断は、目に見えない次元での日本的なるものに上手く対応することとなっているといえる。

## V. 清里におけるキリスト教伝道と日本的なるもの

第IV章でまとめたとおり、清里聖アンデレ教会の建物や販売されている物品については、日本的なるものが反映されているといえる。大野司祭によれば、畳の上に椅子を置いた会衆席は他国からの訪問客にも感動を与えるようで、素晴らしいとの感想が得られるそうである。これは、畳が日本らしいということに加え、畳と椅子、地元の溪谷の石と米国からの鐘をあしらった独特の雰囲気を持つ絶妙な融合も素晴らしいということなのだろう。

山梨日日新聞社（編）（前掲書）によれば、ラッシュが第二次世界大戦後、まず手掛けたのが清里聖アンデレ教会建築であるが、それは、ピルグリム・ファーザーズがかつて米国ニューイングランドを開拓する際、開拓地の中央に礼拝所を作ったのにならい、教会を清里の共同体の中心としようとの信念から出たものであったという（pp. 349・350）。清里聖アンデレ教会の他にも、キリスト教的シンボルは今でも清泉寮の聖アンデレ十字などに見られる。



図6 清泉寮に見られる聖アンデレ十字

その他、ラッシュとの交流のあった船木上次社長の萌木の村レストラン **ROCK** にも、見ようと思えば『聖書』の足跡を見ることが可能である。上掲（図5）右側の写真中、トラクターは萌木の村レストラン **ROCK** の前に置かれている。**ROCK** は、船木上次社長が 1971 年に真っ先に現在の萌木の村敷地内に喫茶店として建てたものであるが、そのエピソードは、キリスト教『聖書』に登場するペトロ（イエス・キリストの 12 人の弟子の一人で、ペトロの意味は岩である）を想起させる<sup>13</sup>。『聖書』には、岩の上に建てられた家は堅固であるとの記述もあるので<sup>14</sup>、その意味でも、船木社長が（自身が意識してか否かはわからないが）最初に立ち上げた建物の名前が **ROCK** であるのは意味深いともいえる。清里の中には要所にポール・ラッシュの写真や銅像があり、ラッシュはキリスト教伝道者であったから、それらも、清里にキリスト教的雰囲気を添えている。

しかしながら、このようにキリスト教的雰囲気がそこかしこにあるから、ということで、清里を訪れた人々がキリスト教にぞくぞくと入信する、というわけでもないだろう。日本のキリスト教人口は統計的には少ないままであるし、清里聖アンデレ教会の信徒数は 200 人で、「日本聖公会横浜教区」のサイトによれば、規模の小さい教会であるという。破竹の

<sup>13</sup> 『聖書』マタイによる福音書 16:18 に「わたしも言うておく。あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。陰府の力もこれに対抗できない」とある。

<sup>14</sup> 『聖書』マタイによる福音書 7:24 - 25 に「そこで、わたしのこれらの言葉を聞いて行く者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家を襲っても、倒れなかった。岩を土台としていたからである」とある。

勢いで信者の伸びが達成されているとは言い難いというほうがあたっているだろう。

それでもここで、前掲の「日本聖公会横浜教区」のサイトでの記述の中にある、清里聖アンデレ教会には春から秋にかけては学校団体など多くの来教者がある、という点と、また、KEEP内の清里聖アンデレ教会のサイトでの記述の中にある、結婚式・葬式を教会で行うことが可能であるという点について着目するのは一考の価値があるだろう。

『ゼクシィ結婚トレンド調査 2019 東海』<sup>15</sup>には、日本での結婚挙式の形式についての報告も含まれている。それによると、神前式 17.7%、仏前式 0.5%、キリスト教式（教会式） 52.2%、人前式 27.8%、その他が 0.5%となっている（いずれも全国推計値）<sup>5)</sup>。しかしながらこれは、日本におけるキリスト教人口が五割を超える、ということではないだろう。文化庁によれば、日本のキリスト教系信者は 1.1%、神道系信者は 47.6%、仏教系信者は 47.1%である<sup>6)</sup>。日本では信仰者の割合と結婚式の形式の割合とが一致しないのである。

この現象においては、筆者はこれまで第 9 回・第 11 回の Taiwan-Philippines-Japan International Academic Conference などで説明を試みてきた<sup>7,8)</sup>。日本でキリスト教式（教会式）の結婚式を挙げたとしても、日常的に聖書を読み、祈り、定期的に教会に行く者はほとんどいないであろう。そしてキリスト教の要であるイエス・キリストによる贖罪という概念も知らない者が大多数ではないのだろうかと思像できる。その意味では、文化庁調べによる、キリスト教系信者が日本では 1.1%であるというのは妥当であろう。

それでは、同じく文化庁調べによる、50%に近い、神道系信者と仏教系信者は、それぞれ、日常的に神道や仏教を信じ、定期的に神社仏閣に詣でているのだろうか。おそらく、信仰生活のあり方にこだわって統計を取れば、神道系も仏教系も信者の人口はキリスト教系信者のものと似通ったものになるのではないだろうか。信仰が日常生活の中に無いからという理由でキリスト教系信者を少数とするのであれば、神道系信者と仏教系信者ももっと少なくなるはずであるし、反対に、幼少のころの七五三、死去してからの葬式をそれぞれ神式、仏式で行う者の数を日本における信者数に反映させるというのであれば、キリスト教式（教会式）の結婚式を挙げる日本人はかなりの数に上るのであるから、それを統計上反映させてもいいはずだ。しかしながら、日本では、一人の中で複数の宗教的営みが共存するのが通常であり、同じ個人が幼少の頃は神社で七五三、成人して結婚する際にはキリスト教会、葬式は仏式で、という選択をする者が少なくない。年間行事も同様で、年始は神社、彼岸と盆は仏教寺院、クリスマスは教会、除夜の鐘は仏教寺院というように、やはり、同じ個人の中で複数の宗教的営みを共存させている。文化庁の宗教人口の調べは、日本の宗教の実情に合っていないのではないか。いずれにせよ、信徒数は少ないけれども、学校の年間行事などで訪れる子供たちの数は多く、また、ライフイベントの結婚式を挙げることを希望する者がいる、という清里聖アンデレ教会は、日本の宗教的風景にそのままあてはまっているということができよう。更に一步進んで、日本古来の神道、外来だが日本に永らく根付いている仏教と肩を並べるほどまでに、キリスト教は日本社会に溶け込んでいる（宗教社会学者マーク・R・マリンズの表現を借りれば、「日本の民族宗教複合体の中に足場を築」いている（マリンズ2005、p.254）<sup>9)</sup>）ということもできるかもしれない<sup>16)</sup>。

<sup>15</sup> 株式会社リクルートマーケティングパートナーズが出している報告書である。

<sup>16</sup> 教会式挙式の動機は、日本におけるキリスト教伝道成果よりは異文化への憧れだろう

## VI. 異文化理解の視点から見た日本におけるキリスト教伝道—その課題—

### (1) 異文化理解の視点と日本におけるキリスト教伝道

前章までに、日本的なるものと、清里聖アンデレ教会の成り立ちと歩み、日本におけるキリスト教伝道と日本の宗教的風景について概観した。

清里聖アンデレ教会を立ち上げたポール・ラッシュが日本的なるものに配慮したのは異文化理解という点からも妥当な判断であったといえる。Hammer (2012) では、異文化理解の発達段階について説明されている。これによれば、異文化理解は段階的に進むもので、共通点を持つ段階が一つの通過点であると考えられるという。異文化理解の発達段階を、Hammer (前掲書) の pp.118・124 を元にまとめたものを表 1 に示す<sup>10)</sup>。もちろん、熟達した異文化理解のレベルに達するには共通点を持てば終わりだというわけではなく、そこから更に進んで異文化の受容や適応の段階に行くことが望まれている。いずれにせよラッシュが日本的なるものに配慮することにより、日本人と清里聖アンデレ教会の間に共通点が出現し、彼らは異文化理解の発達段階の Stage 3 まで進むことができたのである。

表 1 異文化理解の発達段階

Stages 段階		How cultural diversity feels 文化多様性はどのように感じられるか	Mindsets 考え方
Stage 5	Adaptation 適応	valued and involved 文化多様性は価値があり、自分も関わりたいと思う。	Intercultural Mindset 異文化に適応できる
Stage 4	Acceptance 受容	understood 文化多様性について理解ができている。	
Stage 3	Minimization 極小化	not heard 文化多様性が聞こえない（見えない） ※共通点が強調されるため。	Transitional 通過点
Stage 2	Polarization 二極化	uncomfortable 文化多様性は不快に感じる	Monocultural Mindset 自分の文化の枠組み内だけで考えている
Stage 1	Denial 否定	ignored 文化多様性を無視している	

出所：Hammer (2012, pp. 118 – 124) より筆者作成<sup>17)</sup>

日本的なるものとの接点を持たせようとする試みは、清里聖アンデレ教会だけではなく他の教会でも行われている。これにより教会は日本に馴染み、教会を訪れる人は増えるのだろう。それでも、そのことと、神社に祀られている神とイエス・キリストの贖罪との違いを学び、後者の方を選び取ってキリスト教信者になることとは別の問題である。

日本的なるものは、置き換え (replacement) の現象を嫌う。それよりは、古いものも新しいものも、東洋のものも西洋のものも、上手く共存させていこうとするのが日本の伝統である。ラッシュが望んだように日本においてキリスト教伝道を成功させ、日本がキリスト教国家と呼ばれるためには、キリスト教が他の宗教をある程度までは置き換えていくこ

か。しかしながら今や、床の間・神棚・仏壇、畳の間さえない家が日本に増えており、神道や仏教についても、例えば神社仏閣に詣でる時には、異文化テーマパークに遊ぶという感覚が強まっているのではないかと考えられよう。

<sup>17)</sup> 坂本利子，堀江未来，米澤由香子（編著）：多文化間共修—多様な文化背景をもつ大学生の学び合いを支援する—。学文社，2017 の pp.18・19 にも、Hammer (2012, pp.118・124) に準じた表が掲載されている。

とが避けられないのであろうが、それは果たして可能だろうか。あるいは、キリスト教だけではなく、神道でも仏教でも、一人の個人が一つの宗教だけを選択して、幼少の頃より死去するまで同一の宗教的価値観・世界観の中で日常生活を営んでいく、すなわち、国家全体で眺めれば多宗教が共存しているが、個々人の中では選択肢は一つ、という風景が出現することはあるのだろうか。一神教であるキリスト教が、見えない次元での日本的なるもの、すなわち、受け入れる、蓄積する、共に行動する、分かち合う、組み合わせる、譲り合う、というような営み<sup>18</sup>と折り合いをつけることは可能なのだろうか。

このような、共存を志向する日本的なるものについて八咫鏡の比喻で説明しているのは三島由紀夫である。三島（前掲書）によれば、天皇の八咫鏡は共産主義も含めて何でも映し出すことができる。そこで、日本においては共産主義を弾圧することはあってはならないという。しかしながら、天皇制を否定する共産主義が行政権を持つと、その寛容な八咫鏡が消滅する。そこで、日本では共産主義を唱えることは許容されるが、日本が共産主義国家になることは避けなければならない、というのが三島の理論である(pp. 327 - 328)。この喩の共産主義をキリスト教に置き換えれば、キリスト教を八咫鏡に映すことは問題ないが、キリスト教が八咫鏡を乗っ取ると、その鏡には他のものが映らなくなるので、日本文化のアイデンティティも消える、ということになる。

日本がキリスト教国になり、かつ、八咫鏡もそのまま存在することを大胆にも望むのであれば、そのための打開策の一つは、いろいろなものを映し出す八咫鏡自体が実は、もともとキリスト教的なものなのだ、と言い切ってしまうことである。そうすれば、キリスト教が八咫鏡を乗っ取っても事態は大きく変わらない。乗っ取られた八咫鏡はそもそもキリスト教的なものだからである。現在のところ極めて少数ではあるが、そして、多少お互い主張の差はあるが、この立ち位置から日本におけるキリスト教宣教を推進している者がいる。例えば、レムナント出版代表久保有政、マルコーシュ・パブリケーション編集長笹井大庸(故人)、日本キリスト教団高砂教会元老牧師手束正昭、神戸平和研究所理事長杣浩二、外国人では、景教研究所所長のケン・ジョセフ（シニア）や景教研究家で千葉大学でも教鞭を取ったことのあるケン・ジョセフ（ジュニア）などである。このアプローチは日本のキリスト教界の中でも珍しいもので、神学として学術的領域にまでどれだけその活動が広がるか、今後の歩みを見守る段階ではあるが、本論文ではそのアプローチの一部を紹介したい。

彼らの主張は、そもそも日本的なるものの中に、実はキリスト教的要素、あるいはキリスト教から影響を受けたと考えられるものがあり、それに気づかせることが伝道の勘所であるというものである。これは、元来キリスト教は外来の宗教で日本の伝統とは異質のものであるという認識から出発し、だから、両者の接点を意識的に作り出し、畳敷きの会衆席を設えるなどという、ポール・ラッシュのアプローチとは真逆のものであり、日本という文脈とキリスト教とのかかわりを 180° 反対の方向から眺めていることになる。

少数ながらも、彼らは出版という形でこの新しいアプローチを世に問うている。その中

---

<sup>18</sup> これらは筆者が、The SIETAR JAPN 34<sup>th</sup> Annual Conference や 2018 SIETAR JAPAN World Congress などの学会で言及してきた、目に見えない次元での日本的なるものの特徴である。

でも久保（2011）は、古代神道・日本の仏教・ユダヤ教・キリスト教（ユダヤ教が母体）との間に共通点が見られることをコンパクトにまとめている<sup>11)</sup>。同論文における論点は、ニューエイジ的に、どの宗教も根本は同じで外見が異なっているのだ、ということではない。通常日本の歴史教科書などに書かれているように、フランシスコ・ザビエルが初めてキリスト教を日本にもたらしたというのではなく、それよりももっと早く、古代にユダヤ教とキリスト教が日本に伝来しており、その影響を受けながら、他の宗教も含めた日本の文化が発展してきているのだというのがその眼目である。すなわち、日本人が、これこそは日本的なるものと信じていたものの中に、実は、ユダヤ教やユダヤ教を母体とするキリスト教起源のものが多くある、という論理なのである。

ただし、その仮説が正しいとしても、そして実際、見える次元・見えない次元での日本文化とキリスト教『聖書』の伝統との類似は、なるほど気づけば少なくないのであるが、キリスト教の要はあくまでもイエス・キリスト、一方、仏教の場合はブッダ、神道の場合は古事記や日本書紀の神々の伝統、という相違点が厳然としてあるというのも事実である。これらの宗教が信仰の核心部分において共通点を持つためには、その裏付けが、（ニューエイジのような観念的なものではなく）実証を伴う形で強い信憑性を帯びてくることが求められる。既に指摘したとおり、日本的なるものが実はキリスト教（やユダヤ教）的なものでもあるという仮説を出発点とするアプローチは誕生したばかりで、学術的検証はこれから、という段階なのだが、それでも本節ではできる限り伝道の現場での実証的な試みを拾ってみたい。コンパクトな出来具合から、久保（前掲書）をまずは手掛かりとしよう。

久保の同論文の論点は次の三つにまとめられよう<sup>19)</sup>。一つ目は、京都府宮津市の籠神社の宮司を務めたことがある海部穀定著の『元初の最高神と大和朝廷の元始』内に記された、日本においてかなり過去において用いられていた大元神、大元霊神という字句が、一神教でいうところの神に該当する神格を有するという主張を梃に、神道とキリスト教（ならびにその母体であるユダヤ教）の類似性を指摘するものである。久保は神道の造化三神とキリスト教の三位一体の神が似ていることにも言及している。

二つ目は仏教とキリスト教の類似である。これについては、久保（同）では、イエス・キリストの弟子の一人トマスがインドでキリスト教伝道を行ったことで、仏教がキリスト教の影響を受け、阿弥陀仏信仰（阿弥陀仏の名を呼び求める者は皆救われる信仰）が生まれてきたことや、法華経の久遠実成の仏（釈迦は永遠に存在する救い主である）、一乗妙法（法華経が全ての人を救う）、菩薩行道（布教こそが最大の行いである）の思想が作られた等が主張されている。ここでの筆者久保の意図は、日本の仏教は、そもそもキリスト教の影響を受けていたものなのだから、日本人が仏教の教えだと信じているものの中に実はキリスト教のようなものがあるのだ、という結論へと読者を導くことであろう。なお、法華経信仰を日本で広めたので有名なのは日蓮である（ただし日蓮は13世紀の人物）。

三つ目はやはり仏教とキリスト教の類似であるが、その裏付けとしては、景教とも呼ばれたネストリウス派キリスト教が与えたであろう仏教への影響が根拠として用いられてい

---

<sup>19)</sup> 久保（同）では、その他目に見える次元での、ユダヤ教・キリスト教・神道・仏教の類似点も指摘している。ユダヤ教幕屋と神道神社の構造上の類似点、仏教弥勒菩薩の手のポーズに見られるキリスト教的解釈などである。詳細は文末参考文献欄の11)を参照。

る。古代アジアには景教の教えが広がっており、そのために仏教思想の中にキリスト教的なものが見られる、というわけである。ここで挙げられている、景教の影響の系譜に繋がると主張されている仏教人は、空海、善導（中国人）、法然、親鸞である。

中国に景教が伝わったとされるのは、仏教の日本伝来より後のことではないか、景教が仏教の土壌形成に一役買っているというのは、時系列的には理屈に合わないのではないか、という反論があるかもしれない。先に伝来している仏教こそが土台であり、その後に伝来したものが土壌の成分となり得るか、という問いかけである。

ここで指摘したいのは、この反論が是となるためには、6 世紀半ばに伝来した仏教が、それまでに、宗教を含む他の文化に影響を受けておらず、その後も、全くそのままの形で、そして、この形の仏教だけが 1500 年近く変わらず日本に存在しているか、という問いの答えが、然り、とならなければならないということである。

しかしながら、日本伝来前にも仏教はキリスト教の影響を受けていたとの久保の主張は本節で触れたばかりである。また、伝来後、日本国内では仏教は神道とのせめぎ合いがあった。平安から鎌倉にかけては、新しい形の仏教が形成された。このように考えれば、年表上の時間差がそのまま、景教が日本の仏教に影響を与えたと考えることは難しい、との主張の根拠にはなくなるのではないか。景教が中国に来てから後の時代に、日本に誕生した仏教の流れがある。実際、久保（同）で言及されている仏教人のうち、法然、親鸞、日蓮は、12 世紀・13 世紀の人物である。7 世紀に中国で景教徒の教えから影響を受けたと言われる中国人善導の著作を読んで仏教の信仰に入ったのが法然、法然の弟子が親鸞であり<sup>20</sup>、日蓮の信仰した法華経はそもそも、イエス・キリストの使徒トマスの伝道に影響を受けている、従って、今現在の我々が仏教として認識しているものの中に、すぐれてキリスト教的なものがあるのだ、というのが久保のロジックである。もちろん、このロジックの学術的検証は、これからの研究の進展に負うところが大きいだろう。

## （2）学術的領域への広がりという視点での課題

前節では、日本的なるものの中にそもそもキリスト教の伝統がある、という仮説を出発点とするアプローチを紹介した。その担い手はキリスト教牧師など、伝道・牧会領域で活動する者がほとんどであり、その数も多くはないが、彼らがよく依拠する論文の中に、John M. L. Young の “BY FOOT TO CHINA — Mission of The Church of the East, to 1400 —”（以下 BY FOOT TO CHINA）がある。これは Assyrian International News Agency Books Online が、全文（英語）をインターネット上で公開しており<sup>12</sup>、日本語訳（『徒歩で中国へ—古代アジアの伝道記録—』）が後藤牧人翻訳・川ロー彦監修で、イーグレープから 2010 年に出ている。論文巻末の著者紹介によれば、Young は 1961 年、米国ミズーリ州セントルイスのカベナント神学校から名誉神学博士の学位を受けており、更に、1967 以降米国ジョージア州ルックアウトマウンテンのカベナント大学に宣教学の教授として教鞭を取っていた経歴もあるという<sup>21</sup>。このような、大学での活躍経験があるキリスト教徒執筆の文献が引用されることが多いというのは、キリスト教牧師はしばしば、学術研究よりは

<sup>20</sup> 空海は、中国において景教の教えに触れた、とされている。

<sup>21</sup> 英語 PDF 版では p.69、日本語訳では pp. 223 – 224 に記載されている。

伝道・牧会が優先であると言うけれども、やはり、学術的裏付けがある情報を抛り所にする重要性を、どこかで認識していることの表れがそこに出ているのではないかと推測される。

Young (前掲書) の眼目は、景教、あるいはネストリウス派と呼ばれたキリスト教 (Young は *The Church of the East* と呼んでいる。本論文ではまとめて景教とする) が異端だと判断されたのは、神学上というよりは、当時のキリスト教界内の政治的事情によるものだという事である。その論を進める上で、古代に東方へと広がった景教の様が概観されているのであるが、久保らのような立ち位置からスタートしてキリスト教伝道をする者たちにとっては、古代アジアにおける景教の教勢こそが勘所となるのである。

Young の論文の中で、景教の広がりをも端的にまとめているのが、中東から古代ユーラシア大陸にかけてシルクロード沿いに教会が分布している地図<sup>22</sup>や、AD35 から AD1405 にかけての、古代ユーラシア大陸におけるキリスト教を巡る出来事の年表<sup>23</sup>である。その他、同論文では、古代ユーラシアならびに日本で発見された、キリスト教関連の物品の写真も掲載されている。シルクロードの存在は、一つの有機的共同体としての古代ユーラシア大陸のあり様を我々に思い出させる。そこから、シルクロードを通じて日本にも西方文化がもたらされていたから、それと同時に、景教の影響も日本に入っていたのではないかと、この主張も生まれてくるわけである。

しかしながらなおも、神道とキリスト教、仏教とキリスト教との類似点は偶然なのではないのか、との反論もあるだろう。そこで、世界各地の文化に見られる、その文化に特有の宗教と、キリスト教 (と母体のユダヤ教) とのシンボル (ダビデの星や十字架など) の類似を、文化横断的に丹念に拾うことで、その反論に反駁しているのが柚浩二である。柚が著した『日本文化 もとをたどれば聖書から』や『日本古来の神仏は「イスラエルの神」』には、日本古来の神仏とイスラエルの神との類似性を、手を尽くせるだけ集めたものを収録している。一つ、二つぐらいの類似ならば偶然だということもあるだろうが、その数が増え、また、類似にある種のパターンが見られると、偶然の確率は下がっていく。もちろん類似点が増えようとも、そこからは、だから両者のルーツは同じなのだとも、それでもやはり両者は似ているだけなのだとも、両方の結論を導き出せる可能性は依然として残る。

久保、笹井、手束、柚、ジョセフ親子、皆キリスト教徒であるが、キリスト教界の中では異色の存在である。彼ら同士は思いが通じやすいかもしれないけれども、彼らの異色なアプローチを、他のキリスト教徒に理解してもらうことにはかなりの困難を覚えているようである。加えて、キリスト教信仰を持っていない者とも対話していかなければならない。

しかしながら、伝道はそもそも、信を同じくする者に対してではなく、異教徒のように価値観・世界観の違う者に対してなされるものである。この点で伝道はすぐれて異文化理解の営みであるといえるのだが、伝道ではなくとも学術的領域での、キリスト教・ユダヤ教・神道・仏教等諸宗教の比較研究が進んでいくなれば、それもキリスト教伝道に益となるはずである。キリスト教徒である・ないにかかわらず、伝道・牧会という枠組みにとらわれず研究に携わる者の誕生が期待される。キリスト教信仰者ではない研究者との対話を

<sup>22</sup> 英語 PDF 版では p. 26、日本語訳では p. 217 に掲載されている。

<sup>23</sup> 英語 PDF 版では pp. 6・7、日本語訳では pp. 17-22 に掲載されている。

通じて、新たな発見・方向性が見いだされる可能性もあるだろう。

## VII. 結語

本論文では、清里聖アンデレ教会の歩みをヒントに、日本でのキリスト教伝道に関する考察を異文化理解という視点から試みた。清里聖アンデレ教会誕生にかかわったポール・ラッシュは、キリスト教と日本の伝統が異なるという前提で出発し、その溝を埋めるために、清里聖アンデレ教会を両文化の懸け橋としてスタートさせた。その後日本では、キリスト教と日本の伝統はそもそも似ているものであるという前提から出発して伝道を進めようとするアプローチが登場し、本論文の後半では、このアプローチを簡単に紹介した。最後に、このアプローチを巡る今後の課題について触れて、本論文を閉じたい。

前章でも言及したとおり現段階では、このアプローチが学術的領域での裏付けを得られるかどうかは今後の発展を見守るしかないというのが実情なのだが、その行く手を阻むかの事態が、残念ながら見られる。例えば、BY FOOT TO CHINA の日本語訳である。このようなある種特殊な論文が日本語でも読めるというのは素晴らしいことだ。しかしながら、BY FOOT TO CHINA 日本語訳は、英文を全て訳し出しているわけではないのである。前節で紹介した、キリスト教を巡る出来事の年表で、日本史にとって重要であると思われるのは、AD724-748 の、*The visit of a Persian Christian physician to the Japanese emperor and probable conversion of the empress.* という記述である。日本の歴史教科書では、フランシスコ・ザビエルが初めてキリスト教を日本にもたらしたのが定説となっているが、それを覆す大胆な記述であるからである。ところが日本語訳では、この箇所がそっくり無いのである。これはいかなる理由によるものなのか。8 世紀半ば、日本の皇后がキリスト教徒になったなどというのは荒唐無稽なのか。しかしながら、訳としては忠実に訳し出しておいて、注などで、この主張の荒唐無稽さ（もし荒唐無稽であるならば）を指摘することもできるではないか。皇室にキリスト教徒がいたというのは不敬にあたるのか。しかしながら、不敬というのであれば、しばしば保守系団体が不敬だと不快感を示す、反天皇制運動連絡会のデモはどうだろう。日本では言論の自由が保障されているので、反天皇制運動連絡会のデモも許容されているのだが、それならば、皇后がキリスト教徒になったという主張が活字になるのも許されているいいのではないか。それともこれは、皇室というよりは、反天皇制を掲げる、日本の一部のキリスト教徒側に何らかの事情でもあるのか<sup>24</sup>。いずれにせよ、論文として世に出ているものを日本語で全文紹介して、議論の俎上に載せようとしないのであれば、学術的検証を行うことなど、ますます難しくなってしまう。

もう一つの課題は、共通点を重視して異文化理解を深めるというアプローチの持つ弱点である。すなわち、共通点の中に相違点が埋もれ、いつの間にか自分が他人になってしまう、自分も他人も区別なく自分の存在そのものが消えてしまうという可能性がそこに含まれているという事実である。古代アジアに勢いを得、仏教にもキリスト教的影響を与えた

---

<sup>24</sup> 久保らのようなアプローチの反論としては、第二次世界大戦中、神道（正確には国家神道）にキリスト教が抑圧されていたため、神道とキリスト教の接近は好ましくなくないというものや、日本文化とのシンクレティズムを警戒するものがある。本稿の紙幅内では扱い切れないので、機会を改めて詳述したい。

とまで主張される景教だが、実は、土着の信仰・習慣との共通点を究めすぎたために、次第にキリスト教の原点、福音を見失ってしまった。そして、最終的にはアジアの地に埋没したのである。Young（同）では、皇帝や高官の理解を得ようとしてなのであろうか、死者への祈りを景教徒らが捧げるようになったと記されている。死者への祈りはアジアでよく見られる宗教の習慣であるが、これが信仰の主役となった時、彼らのキリスト教信仰は姿を消したのではないかと Young は結論づけているのである<sup>25</sup>。

日本の長い歴史の中で培われてきた国内の文化の土壌は、その中で異国の文化が根付くことをどこまで許容することができるのだろうか。今後日本のキリスト教が、イエス・キリストの贖罪を要として日本に広まるのか、古代アジアの景教のように祖先崇拜の宗教の様相を呈していくのか。あるいは、一般の日本国民の間では令和の現在、年間行事・ライフイベントの一部だけが神道・仏教色に染まっているのだが、キリスト教も同じような形で収まっていくのか。ラッシュが第二次世界大戦後、再来日した時には思いもつかなかった事態に日本と世界は直面している。日本キリスト教伝道を巡る環境も変化している。ラッシュが今生きていたら、日本の宗教的風景の将来像をどのように描くだろうか。キリスト教伝道という領域では、ラッシュが挑んだ戦いの勝利への道は未だ長いようだ。

## 謝辞

情報提供をいただいた清里聖アンデレ教会のバルナバ大野清夫司祭、ポール・ラッシュの働きを最初に筆者に紹介してくださった星城大学経営学部神野真寿美教授、本論文要旨の英文をチェックしてくださった J. Ichikawa 氏に心より御礼申し上げる。

## 参考文献

- 1) 山梨日日新聞社（編）：清里の父ポール・ラッシュ伝。山梨日日新聞社，2004.
- 2) 北杜市高根町（編）：「清里開拓の父」ポール・ラッシュものがたり。特定非営利活動法人つなぐ（つなぐ NPO）つなぐほんほん堂，2008.
- 3) 三島由紀夫：文化防衛論。ちくま文庫（＝三島由紀夫：文化防衛論。新潮社，1969），2006.
- 4) 八代京子，町恵理子，小池浩子，吉田友子：異文化トレーニング[改訂版]—ボーダーレス社会を生きる—。三修社，2009.
- 5) ゼクシィ結婚トレンド調査 2019 東海（オンライン）入手先<[https://souken.zexy.net/data/trend2019/XY\\_MT19\\_report\\_11tokai.pdf](https://souken.zexy.net/data/trend2019/XY_MT19_report_11tokai.pdf)>，（参照 2019-11-21）
- 6) 文化庁（編）：宗教年鑑 平成 30 年版（オンライン）入手先<[https://www.bunka.go.jp/tokei\\_hakusho\\_shuppan/hakusho\\_nenjihokokusho/shukyo\\_nenkan/pdf/h30nenkan.pdf](https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/hakusho_nenjihokokusho/shukyo_nenkan/pdf/h30nenkan.pdf)>，（参照 2020-2-21）
- 7) Kato, T.: Unnoticed Cultural Diversity in Japan. The 9th Taiwan-Philippines-Japan Academic Conference: Sustainable Tourism Proceedings: 249 - 268, 2017.
- 8) Kato, T.: On the “Japanese-ness” as a change facilitator, a diversity holder and a society sustainer. The 11th International Workshop on Regional Innovation Studies

---

<sup>25</sup> 英語 PDF 版では pp. 60 - 61 に、日本語訳では pp. 197 - 198 にまとめがある。

2019 [IWRIS2019], The 11th Taiwan-Philippines-Japan International Academic Conference 2019 [TPJIAC2019] : 119 - 122, 2019.

- 9) マーク・R・マリンス（高崎恵訳）：メイド・イン・ジャパンのキリスト教．トランスビュー，2005.
- 10) Hammer, M.: The Intercultural Development Inventory: A New Frontier in Assessment and Development of Intercultural Competence. In M. V. Berge, R.M. Paige, & K.H.Lou(eds.):Student Learning Abroad, Sterling VA: Stylus Publishing, 2012.
- 11) 久保有政：日本文化の中に封印されたキリスト教．HAZAH No.197 : 6-19, 2011.
- 12) John M. L. Young: BY FOOT TO CHINA — Mission of The Church of the East, to 1400 — (オンライン) 入手先<[www.aina.org/books/bftc/bftc.pdf](http://www.aina.org/books/bftc/bftc.pdf)>, (参照 2019-12-18)、ジョン・M・L・ヤング（後藤牧人翻訳・川口一彦監修）：徒歩で中国へ—古代アジアの伝道記録—．イーグレープ，2010.